

# 植民地主義者としてのトクヴィル

藤 田 勝 次 郎

## 一 はじめに

『ルモンド・ディプロマティック』(*Le monde diplomatique*) 紙の二〇〇一年六月号にオリヴィエ・ル・クール・グランメゾン (Olivier Le Cour Grandmaison) の「トクヴィルが殺戮を正当化したとき」(Quand Tocqueville légitimait les boucheries) といういさゝか衝撃的なタイトルをもった論文が掲載された。<sup>(1)</sup> ここで彼は、これまでのアレクシ・ドゥ・トクヴィル (Alexis de Tocqueville 1805-1859) に関する研究が彼の『アメリカの民主主義』(*De la démocratie en Amérique*, première partie, 1835, seconde partie, 1840) を中心としたものであり、彼の「リベラルなデモクラット」の一面が強調されてきたこと、反対に主としてアルジェリアを巡る彼の植民地論については、フランスの研究者がほとんど何も言及してこなかったとし、<sup>(2)</sup> 植民地支配のための暴力を肯定し、「植民地化のための支配と支配の永続を確かなものとするための植民地化、このようなものこそ彼が擁護してやまなかった方向である」として、デモクラットの隠されてきた一面に注目することを促すのである。

植民地主義者としてのトクヴィル

植民地主義者としてのトクヴィル

一方、わが国におけるトクヴィル研究も、これまで彼の『アメリカの民主主義』や『旧体制と大革命』(*L'Ancien Régime et la Révolution*, 1856)について行われており、彼の植民地論を取り上げたものはほとんどないといつてよい。<sup>(3)</sup>例えば、ごく最近のトクヴィル研究である河合秀和『トククヴィルを読む』(岩波書店二〇〇一年)でも民主主義の危機的状況にある現代にトクヴィルの民主主義論をよみがえらせようとするものではあるが、そのような意図からここでも彼の植民地論についての言及はまったくない。

本稿のころみはトクヴィルのアルジェリアを中心とする植民地論の再検討であり、それを通して、一九世紀前半のフランス自由主義を代表する思想家の一人である彼の植民地主義者としての一面を明らかにすることである。「トクヴィルのアルジェリアについての論述は、フランスの自由主義思想家がその初期における広い植民地計画についての政治的・軍事的・道徳的側面をどのように取り扱ったか、を知る計り知れない情報源なのである」<sup>(4)</sup>。この検討の対象となる彼の著作は、主として「アルジェリアにかんする手紙」(*Lettres sur l'Algérie, Presse de Seine-et-Oise*, 1837)、「アルジェリアにかんする研究」(*Travail sur l'Algérie*, 1841)、「アルジェリアにかんする報告」(*Rapport sur l'Algérie, Le Moniteur*, 1847)であり、さらに彼の植民地論に関連するものとして「奴隷の解放」(*L'émancipation des esclaves, Le Siècle*, 22, 28 octobre, 8, 21 novembre, 6, 14 décembre 1843)、「さらにイギリスのインド支配についての草稿」<sup>(5)</sup>「インドにかんする著作の下書」(*Ebauche d'un ouvrage sur l'Inde*)などである。

(1) この論文は、同紙にこれまで掲載されてきたフランス植民地主義にかんする他の二一の論文とともに *Polémiques sur l'histoire coloniale, Manière de voir* 58, *Le Monde diplomatique*, juillet-août 2001, に再録。

- (2) 例外としてあげられた文献は、T. Todorov (éd.) ; *De la colonie en l'Algérie*, par A. de Tocqueville, Bruxelles, Complex, 1988. ditto ; *Nous et les autres. La réflexion française sur la diversité humaine*, Paris, Seuil, 1989. 小野・江口訳『われわれと他者』法政大出版二〇〇一年である。ただ、トクヴィルの植民地論を取り上げたものは、トドロフのほか皆無ではな<sup>5</sup>。J. Lacouture et D. Chagnollaud ; *Le désespère. Figures et thèmes de l'anticolonisme*, Paris, Denoël, 1993. があり、また最近フランス以外に J. Pitts ; *Introduction to Writings on Empire and Slavery*, by A. de Tocqueville, edited and translated by herself, Baltimore & London, Johns Hopkins U. P., 2001. がある。なお、トクヴィルについての定評ある伝記的研究 A. Jardin ; *Alexis de Tocqueville 1805-1859*, Paris, Hachette, 1984. 大津訳『トクヴィル伝』晶文社 一九九四年は、トクヴィルのアルジェリアとのかかわりについてふれてはいるが、それはただ事実として言及しているにすぎない。
- (3) ここでも、例外として、彼の植民地論を取り上げた若いトクヴィル研究者によるわが国唯一といつてよい論稿がある。稲井誠「トクヴィルのアルジェリア論——政治理論と『社会問題』を巡って——」大阪市大『経済学雑誌』一〇〇〇巻四号。その他、トクヴィルの植民地主義に多少ともふれたものとして、平野千果子『フランス植民地主義の歴史』人文書院二〇〇二年第一章、山内昌之『近代イスラームの挑戦』世界の歴史二〇巻 中央公論社 一九九六年第二章がある。
- (4) Pitts ; *op. cit.*, p. xiii.
- (5) これらはすべて *Oeuvres complètes de A. Tocqueville*, Paris, Gallimard, t. 3-1, 1962. に収められており、本稿はこれに基づいているが、これらはまた、近年刊行され始めた *Oeuvres*, édition de la Pléiade, Paris, Gallimard, t. 1, 1991. にも収録されている。

## 二 奴隷制度と植民地主義

フランスは、一八三〇年七月王政の始まりとともに、アルジェリアへの派兵、占拠、「征服」とその植民地支配を開始し、アブド・アルカーデイルとの激しい戦いを通して一八四〇年以降アルジェリアに対する本格的な植民地化を始める。

トクヴィルは、先にみたように、アルジェリアの植民地化の当初から、またその進行と歩調を合わせるようにかかわりをもつことになる。彼のアルジェリア植民地とのかかわりは、さきにのべた一八三七年の「アルジェリアにかんする手紙」に始まり、一八四七年の「アルジェリアにかんする報告」までの一〇年間に集中しているが、この時期は彼の名著『アメリカの民主主義』刊行後の彼の執筆活動の円熟期にあたり、また彼の議会における政治活動期——彼は一八三九年三月ノルマンディ地方のヴァローニユ選出の下院議員となり、一八五一年一月ルイ・ナポレオンのクー・デタとともに政界から引退する——と重なる彼の生涯の最も重要な時期にあたる。さらにこの時期、彼の関心は、アルジェリアとともに、それとのかかわりでイギリス領インドについての調査、奴隷制度廃止問題などに及んでいる。これらは、彼の生涯の一時期、ほんの一こまに刻まれるにすぎないといったものではなく、「トクヴィルの政治的経歴のすべてにわたった本質的な関心事のひとつ<sup>(1)</sup>」であった、といわなければならない。

ところで、トクヴィルの植民地主義について明らかにするに先立って、彼の奴隷制度廃止論についてふれておかなければならない。なぜならば、彼において植民地主義思想の形成は奴隷制度廃止問題とからんで展開される

からである。

フランスは、すでに一七世紀、ルイ一三世の時代に、主としてアンティル諸島のフランス植民地において入植者労働力の不足を補うために黒人奴隷が公認され、同時にフランス本国・アンティル諸島・奴隷供給地のアフリカ地域との三角貿易を推進することになった。この際、黒人奴隷はアフリカからアンティル諸島へ供給される重要な「商品」であった。一六八五年には、コルベールによって制定され、ルイ一四世によって発布された「黒人法」(Code noir)によって奴隷制度は確立した。<sup>(2)</sup>このような旧体制のもとで、重商主義政策の一環としてなされた奴隷制度に対して、旧体制末期になるとさまざまな反対運動が展開した。革命の前年には「黒人友好協会」(Société des Amis des Noirs 1788-91)が、また革命後には「黒人友好・植民地協会」(Société des Amis des Noirs 1796-99)が設立され、ミラボー(C. H. de Mirabeau)やロンドルセ(M. J. A. N. de C. Condorcet)を中心とした「反奴隷制度のキャンペーン」が展開された。<sup>(3)</sup>一九世紀にはいると、グレゴワール神父(abbé Grégoire)、シュルシエール(V. Schœlcher)を初め、多くの自由主義者、共和主義者、さらには社会主義者らによって反奴隷制度の運動が繰り広げられた。これらの長期にわたった運動が実を結び、二月革命期、一八四八年四月に臨時政府によって奴隷制度は最終的に廃止されることになる。<sup>(4)</sup>

だが、このような反奴隷制度の主張は反植民地主義と一致するものではない。後にみるように、むしろ反奴隷制度論は植民地主義の正当化の根拠として用いられるのである。大革命前後の反奴隷制度論の場合でもそうであったし、<sup>(5)</sup>一九世紀の代表的反奴隷制度論者シュルシエールの場合もそうであった。<sup>(6)</sup>

トクヴィルの場合も同様であった。彼は、すでに一八三二年から翌年までのアメリカ旅行でそこでの奴隷の実

植民地主義者としてのトクヴィル

態をみていたし、そのことは『アメリカの民主主義』のなかでもふれている。三四年以降、彼は設立された「奴隷制度廃止フランス協会」(Société française pour l'abolition de l'esclavage)に参加し、また下院に設立された奴隷制度廃止にかんする委員会でドゥ・トラシー(A. C. V. Desut de Tracy)——彼はイデオロギー論のドゥ・トラシーの息子——の提案を受けて、その報告者となり、それは『植民地における奴隷制度の報告書』(Rapport fait au nom de la commission chargée d'examiner la proposition de M. de Tracy, relative aux esclavages des colonies.)として三九年刊行されるほか、彼はこの問題について先にのべたように『ル・シエクル』紙に論文「奴隷の解放」を連載する。

これらの論考におけるトクヴィルの奴隷制度廃止論の論拠はいたって明白である。それは、キリスト教の立場であり、フランス革命が提示した人間の自由と平等の観念である。

「全世界のカーストの、階級の原理を打ち壊し、いわれていたように、失われていた人類の立場を見だし、またちようどすべての人間が神の前で平等であるという観念をキリスト教が作り出したように、すべての人間が法の前で平等であるという考えを全世界にひろめたのは、われわれであるし、奴隷制度の廃止の眞の生みの親であるのはわれわれである、と私はいうのである。」<sup>(7)</sup>

「われわれを専念させている問題は、それゆえ理論の領域から出て、実践的な政策の分野に入る。問題は、奴隷制度が悪いのか、を知ることではまったくない。それを終わらせるべきであるなら、それが終わるのはいつであるのか、また如何にすることが望ましいのか、を知ることである。」<sup>(8)</sup>

このように奴隷制度の存続に強く反対するトクヴィルは、また同時に徹底した植民地の擁護者でもあった。この一見パラドキシカルにみえる二つの主張は、彼のなかでは決して矛盾するものではなかった。トクヴィルの植民地主義は、政治的・経済的諸問題に対する彼の一貫した立場から、彼の政治的・経済的原理に深く関わるものであった。このことについては後に明らかにしたい。ここでは彼の植民地主義正当化の論拠としての、「文明化」論についてふれておきたい。「文明化」論はトクヴィルにとどまらず、一九世紀に明確な形で現れてくるオリエンタリズムを背景にして、多くの植民地主義者にみられるものであるが、それは、いうまでもなく西欧の非西欧世界に対する植民地支配を正当化する論拠となるものである<sup>(9)</sup>。

先に示したように、トクヴィルは奴隷制度批判をキリスト教および一八世紀の啓蒙思想を根拠に行った。神や法の前で出自や人種を越えた人間の「平等」論がいったん確立すると、「人間が人間を人格的に所有する」奴隷制度は、この点で否定される。「人間は、人間を所持する権利を決してもつていなかったし、所持しているという事実は、ずっと不正であったし、今も不正である。」(Rapport, relative aux esclavages, op. cit., p. 54.) しかし、こうした西欧「文明」は確かに奴隷制度批判の原動力となるものであったが、それは同時に「文明化」的・開明的役割を担うという理由づけから植民地化を肯定する根拠ともなるのである。フランスには当時なお異人種に対する根強い偏見が存在した。例えば、トクヴィルの友人であり、外交官であったゴビノー (G.-A. de Gobineau) は、白人に対する黒人奴隷やアルジェリアの「原住民」の「生物学的」差異を説くのであるが、当然のことながら、トクヴィルはこのような「偏見」に与することはなかった。だが、トクヴィルがアルジェリアの「原住民」に対して次のようにのべるとき、そこには彼によって西欧、ことにフランスの「文明」的優越性が強く意識されていること

がわかるのである。

「われわれのような力のある文明化された人民が、ほとんど未開人種の小集団 (*petites peuplades*) に対して、その知性の卓抜性というただ一つの事実によって、ほとんど抗したい影響力を行使すること、また文明化されたわれわれにこの未開人種の小集団を強制的に編入させるためには、彼らとの恒久的な関係を樹立すること<sup>(10)</sup>で十分なのである。」

トクヴィルは、このように両者には「文明化」に向けての社会の発展段階の相違があることは明らかだ、と考える。彼によれば、アルジェリアの「原住民」、ことに山岳地帯に居住するベルベル族は、人類の「幼年期のうちに小さな部族」として存在し、彼らは、あたかもルソーのいう「自然人」のように「ある種の社会秩序に従ってはいが、森の奥で未開人の自立性を享受している孤立的個人」に似る、というのである。このような彼ら<sup>(11)</sup>置かれた状態は、「彼らに固有なものではなく、彼らが存在する文明の段階に属したもの」である、と考えるのである。このように、ルソーの「自然人」と現実のベルベル族とを同一視することは、いささか極論であるにしても、少なくとも彼は、ムスリム社会全体を「非文明的ではないにしても」、「遅れた、不完全な文明であり」、その意味で彼らを「半ば文明化された人びと」であると考えるのである。一八世紀モンテスキューやスミスなどによって説かれた社会発展段階説こそ、このようにトクヴィルによって高度に「文明化」した国による「文明化」の発展度の低い国に対する植民地化を正当化する根拠となるのである。こうして、トクヴィルにおいて「文



「明」は、奴隷の解放と植民地化の双方を導き出す諸刃の剣であったのである。否、それ以上に彼は、植民地の存続こそが奴隷制度の廃止の前提であり、その必要条件であるとすら考えるのである。

「私が強く納得させられていることは、今日熱帯の所有領にかんする国民の関心のなさであり、それが奴隷解放が真剣に意図されていることに対する最大の、またいうならば唯一の障害なのであるし、政府と国が、植民地の保持がフランスの力と偉大さにとって必要であると納得させられたとき、この一件「奴隷の解放」は成就されるであろう、と私は信じたのである。<sup>(17)</sup>」

- (1) J.-J. Chevalier et A. Jardin ; *Introduction aux Œuvres complètes*, t. 3-1, p. 8.
- (2) A. Dufrénoy ; *Postface aux Réflexions sur l'esclavage des Nègres*, par M. J. A. N. de Condorcet, Paris, Mille et une nuits, 2001, p. 78.
- (3) L. C. Jennings ; *French Anti-Slavery, The Movement for the Abolition of Slavery in France, 1802-1848*, Cambridge, Cambridge U. P., 2000, chap. 1.
- (4) フランスにおける奴隷制度についての文献は多いが、むしろ最近のものに参照。 *Les abolitions de l'esclavage. Actes du colloque international tenu à l'Université de Paris VIII*, Paris, UNESCO, 1995. M. Dorigny (sous la direction de) ; *Esclavage, résistances et abolitions*, Paris, CTHS, 1999. N. Schmidt ; *Abolitionnistes de l'esclavage et réformateurs des colonies*, Paris, Karthala, 2000.
- (5) F. Gauthier ; *La première abolition de l'esclavage ou l'ouverture du procès du colonialisme 1793-94*, dans *Périssent les*

植民地主義者としてのトクヴィル

植民地主義者としてのトクヴィル

*colonies plutôt qu'un principe* : Contribution à l'histoire de l'abolition de l'esclavage 1789-1804, (sous la direction de F. Gauthier), Paris, Société des études robespierristes, 2002.

- (6) 彼は次のように断言する。「黒人の解放、このようなことがわれわれの第一の願望である。植民地の繁栄、このようなことがわれわれの第二の願望である。われわれは、前者を人類の名において求め、後者を国民の名において求め、われら双方を、正義の名において求めぬ。」(V. Schetler: *Des colonies françaises. Abolition immédiate de l'esclavage*, 1842, rééd., Paris, CTHS, 1998, p. xxv. またこの点 A. Girellet: *Victor Schetler, abolitionniste et républicain*, Paris, Karthala, 2000, p. 277.

- (7) Intervention dans la discussion de la loi sur le régime des esclaves dans les colonies, *Œuvres*, t. 3-1, pp. 124-25.

- (8) Rapport, relative aux esclavages, *Œuvres*, t. 3-1, p. 42.

- (9) この問題に関連して主としてシュルシエールを検討するものとして平野千果子『「文明化」とフランス植民地主義』『思想』九一五号二〇〇〇年九月。

- (10) *Seconde lettre sur l'Algérie* (22 août 1837), *Œuvres*, t. 3-1, p. 148. また彼は一八五七年一月二七日イギリスのインド支配に関してイギリスの彼の友人ハザートン(E. J. H. Hatherton)に宛てて「私は、……これまで一度たりともあなた方の勝利を疑うことはなかった。あなた方の勝利は、キリスト教の勝利であり、文明の勝利なのだ」と書くのである。  
(*Œuvres complètes*, éd. par G. de Beaumont, Paris, 1861-77, t. 9, p. 423.)

- (11) *Première lettre sur l'Algérie*, *Œuvres*, t. 3-1, p. 131, sq. 傍点は引用者。またこの点 Pits: *op. cit.*, p. xvii.

- (12) *L'émancipation des esclaves*, *Œuvres*, t. 3-1, p. 84. この点について、ある論者たちは「奴隷解放の必要条件としての植民地化、バラドックスには当惑させられる。植民地化に対するトクヴィルの弁論が詳細で、際だち、熱気を帯びているだけ、当惑させられる」(J. Lacouture et D. Chagnollaud: *op. cit.*, p. 93)という。しかし、彼の「文明化」論を検

討するならば、そのように「当惑」するにはおよばない。

### 三 アルジェリア植民地論

トクヴィルが奴隷制度廃止と植民地の擁護とに実践的にかかわるのは、時期の上でも一致していた。さき述べたように、トクヴィルが実際に奴隷制度廃止運動に積極的に参加したのは、一八三五年の「フランス奴隷制度廃止協会」への加入から四三年『ル・シエクル』紙での一連の論文公刊にいたる数年であった。この時期の彼は、同時にアルジェリア植民地に深く関わる時期でもあった。先にみたように、四〇年以降始まる本格的な植民地化を考えるならば、トクヴィルはフランスのアルジェリア支配の最初から関心をもった、ということができる。すなわち、先にあげた「アルジェリアにかんする手紙」に引きつづいて、四一年から短期間ではあったが友人ボーモン(G. Beaumont)らとともにアルジェリアに渡り、そこでの調査をもとに「アルジェリアにかんする研究」——これは草稿のまま置かれ、後に『全集』に入れられる——を書く。さらに四六年二度目のアルジェリア旅行を行い、翌年下院でのアルジェリアにかんする特別予算検討のために特別委員会に向けて報告書を作成することになる。この報告書は「アルジェリアについての報告」であることはいうまでもない。

以上のように、彼が取り組む奴隷制度と植民地という二問題は、时期的に一致したということだけではない。両者は、経済問題としても密接なかわりをもっていた。フランスでは、産業化と農村の零細的土地所有によって一八三〇年代から次第に過剰労働力、貧困が「社会問題」となってくる。このような情況のもとでは、労働力、

植民地主義者としてのトクヴィル

不足を補うための植民地——主としてアンティル諸島のそれ——における奴隷制度は、もはや現実的意味をもたなくなる。

トクヴィルは、植民地が経済的な側面と政治的なそれとの二重の重要性をもつ、と考えた。政治的意義については後にふれることとして、ここでは経済的意義についてみたい。彼は、産業化の進展のなかでかつての自足的な経済にみられなかった経済的不安定性<sup>(1)</sup>が生み出されること、また産業化は、富裕を生み出す一方で、社会の底辺で「貧窮状態」<sup>(2)</sup>を絶えず作り出す、と考えた。しかも、このような経済的不安定性にくわえて、増大する労働者階級と社会主義の台頭が、トクヴィルにとって極めて脅威なものとなるのである。

「今日すべてのヨーロッパ大国が示す光景を見れば、いたるところで労働者階級がますます多数となっている。彼らは、ただ数の上で増大しているだけでなく、力の上でも増大している。彼らの要求と情熱は、国家の安逸と政府の存在自体に極めて直接的に作用しており、それは産業的危機が次第に政治的危機となっていくほどである」<sup>(3)</sup>。

それにくわえて、「ヨーロッパ大国」に経済的危機をもたらすのは、「国外市場の不安定性」である。この「不安定性」を解消するものこそ、植民地の存在である。外国貿易において「産業は絶えず偶然的なチャンスに身を任す」のに対し、「植民地の市場では大きな経済的変動はまれ」であり、「流通は、外国でありうるよりかなり少ないにしても、それが突然止まってしまうことは決してなく、植民地によって、本国の経済は「さほど豊かで

はないにしても、はるかに穏やかである」、とトクヴィルは考える。(Emancipation, op. cit., p. 85)

以上のように、植民地は独占的市場を形成し、本国に経済的「安定性」を生み出すだけではない。それ以上に植民地、ここにここで問題にされるアルジェリアの場合は、本国の過剰労働力の移住、植民という、より大きな意義をもつ。この点で、彼はアルジェリア植民地がイギリスのインド支配とは異なる、と考える。彼は、イギリス人が一億人のインドを「三万人足らずの軍隊」によって「征服」したが、彼らは移民による植民地の建設はしなかった、という<sup>(4)</sup>。

「ある国を征服するには二つの方法がある。第一は、住民たちを依存のもとにおき、彼らを直接あるいは間接に統治することである。これはインドにおけるイギリス人の体制である。第二は、旧住民を征服民族によつて置き換えることである。<sup>(5)</sup>」

トクヴィルにとって、アルジェリアの植民地は、当然後者でなければならなかった。ただ、「旧住民を征服民族」に置き換えるといっても、ヨーロッパ人がアメリカで出会った先住民よりも、数の上で勝るアルジェリアの「原住民」に対してアメリカで行われた徹底した「分離政策」が果たして可能であるのか、これがトクヴィルに課せられた課題であった。アルジェリアの人種構成は、主として先住民であるベルベル族とオスマン帝国時代東方から移住したアラブ族から構成されていた。トクヴィルは、初め比較的穏健なベルベル族との共同生活が可能であり、「時が」ヨーロッパ人と「原住民」の「二つの人種を混交するにいたることはありえない、と考える理

由はまったくない」と考えた。<sup>(6)</sup>しかし、アルジェリア調査旅行の過程で、トクヴィルの当初の樂觀論は影をひそめることになり、兩人種混交論に次第に懷疑的になる。この主張は、「アフリカにいたことがなかった人によってしかなされないであろう。そこで人は、ムスリム社会とキリスト教社会が不幸にも何の結びつきもないこと、また彼らは、二つの並置され、また完全に分離した二つの社会体を形成していることを知らされたのである。」(Travail, Œuvres, t. 3-1, p. 275.)

ところで、このようにアルジェリアで「原住民」と生活を異にするヨーロッパ人は、当然ではあるが主として農業に従事する。ここで入植者と「原住民」との土地を巡る激しい対立が起こるのは必然である。「兵士の陰から耕作者が現れるときから、彼らは、問題が単に彼らを征服することにあるだけではなく、彼らから所有地を奪い取ることにある、と考えるのである。争いは、もはや政府と政府ではなく、人種と人種である。」(Travail, op. cit., p. 282.) トクヴィルは、こうした対立を緩和するためアルジェリアの公有地に着目する。「権力が専制的であるような」アルジェリアでは、広大に存在する「国家の特殊的所有地」(Propriétés particulières de l'Etat)を入植者に配分することから始めなければならないし、それらは「その国で最もよい土地」であり、「われわれは誰の権利を傷つけることなしに、これらの土地をヨーロッパ人耕作者の配分しうる」とする。<sup>(7)</sup>しかし、入植者に必要な土地がそれによって満たされない場合、当然、私的所有が十分存在していないアルジェリアでは「部族の土地の一部も同様の使用目的を受ける。」(Rapport, op. cit., p. 381.) トクヴィルは、入植者の導入、植民地化を進展させるためには、「必然的に暴力的であるだけではなく、明らかに不公平な政策」、「多くの部族の所有地を奪い、彼らをおそらく悪くなるであろうような別の場所に移住させる」政策が必要である、とさえ明言するのである。(Travail, op.

cit., p. 242.) 彼は、著作の随所で植民地化と「支配」——当然「暴力」を伴う——の同時的存在の必要性を説く。彼にとつては、「支配」なき「植民地化」は不可能であるし、「植民地化」なき「支配」は無意味である、と考えられた。こうした暴力を伴う「支配」を肯定する彼は、敵対する部族に激しい武力制圧をくわえ、時として本國議會で批判の対象ともなった総督ビュジョー (Th. R. Bugeaud de la Pinconnette) に対して批判しつつも、彼の植民地支配論を「新しい科学」と見なし、「ビュジョー將軍が、この國で行つた最大の貢獻の一つは、新しい科学を広め、完成させ、すべての人に知らしめたことだ」 (Rapport, op. cit., p. 316.) と賞賛さへするのである。

以上のように、トクヴィルは、植民地が主として安定的な市場と過剰労働力のはけ口を形づくる經濟的意義をもつ、と考えた。まさしく彼の植民地論は「貧窮<sup>ポベリスム</sup>状態」を打開する政策として構想されたのである。しかし、彼はそれ以上に植民地がもつ政治的意義を忘れることはなかった。彼は、インド植民地を論じた論稿の「続編プラン」のなかで「インド、——重要な位置。そこからイギリスは全アジアを支配する。すべての國をてらす光。このことが人民全体に与える偉大さと力の感情。人民が征服の価値を判断しなければならないのは、必ずしも財政的・商業的考慮からではない」<sup>(8)</sup>、といい、植民地獲得のもつ政治的意義を強調するのである。ことはアルジェリアについても同様である。

「もしフランスが、この國の自然の困難とそこに住む野蛮な小部族の敵対しかないので、<sup>(9)</sup>「植民地化」の事業を前にたじろいだならば、世の目には、自分自身の無力に屈し、勇氣がかけていたために屈服したように映るであらう。それが獲得したものを安易に手放し、その限界の中に自ら平和理に身を引きこもらせるすべ

植民地主義者としてのトクヴィル

ての人民は、その歴史のよき時代が過ぎ去ったことを宣言している。その人民は明らかに衰退の時代に入つてゐる。」(Travail, op. cit., p. 214.)

トクヴィルにとって植民地支配は、国家に対する「偉大さと力の感情」を鼓舞し、人民が「衰退の時代に入る」のを阻止するという、まさしくナシヨナリスティックな意義をもつのであった。ナシヨナリズム——一方で民主主義の危機と再生を説く自由主義者トクヴィルを考えると、人は不可解な思いに駆られるかもしれない。しかし、トクヴィルの民主主義論は、ナシヨナルの視点と無縁なものではない。周知のように、トクヴィルは、貴族制社会が民主主義的社会へ変わるとき、身分制的な階層的秩序が崩壊し、大量の諸個人からなる「平等」の時代が実現する、とする。彼は、『アメリカの民主主義』でこの民主主義的社会において「エゴイズム」が「人間を自分ひとりだけに結びつけ」、「自分を偏愛させ」、「すべての徳の萌芽を枯死させ」、また「エゴイズム」とは異なるが、「反省的で平和的な感情」である「個人主義」が、それぞれの個人を「その同胞の大衆から孤立させ」、家族などの「小社会」に閉じこもらせ、「自ら進んで大社会をそれ自体に任せ放題にし」、「公徳の源」を枯らす、と説くのである。<sup>(9)</sup>このような「エゴイズム」と「個人主義」こそ、トクヴィルが友人J・S・ミルへの手紙でのべた「物的安逸に対する興味と精神の脆弱さ」、「習俗の漸次的脆弱、精神の墮落、興味の凡庸さ」<sup>(10)</sup>を生み出すものであった。

人がこのような「偏狭で知性を欠いたエゴイズム」から脱却するため、トクヴィルは、「愛国心」(patriotisme)に期待をかける。「愛国心」といっても、もとよりトクヴィルは、「無反省で無欲な」かつての「王政の本能的愛



「国心」ではなく、「知性から生まれ」た「共和制の反省的愛国心」を念頭に置く。「エゴイズム」と「個人主義」の支配は、「王政の本能的愛国心」がすでに過去のものとなつてはいるが、「共和制の反省的愛国心」がいまだ生まれていないことを意味している。このようなかで、トクヴィルは「個人的利益」を「国益」に結びつける「共和制の反省的愛国心」の誕生に期待するのである。(Démocratie, *op. cit.*, pp. 269-70. 訳書中巻二三九―四一ページ。)

「人びとに対し彼らの祖国の運命に関心を起こさせる」唯一の手段として、トクヴィルは、『アメリカの民主主義』では「人びとをその国の統治に参加させる」こと、というに止めている。(ibid., p. 271. 訳書中巻一四一ページ。)しかし、このような人びとを「その祖国の運命に関心を起こさせる」手段として、トクヴィルが、これまで問題にしてきた植民地の保持を考えていたことは明白である。植民地の獲得とその保持こそ、フランスの「国益」を人びとに鮮明にさせ、フランスの「世界の全般的事業に対する影響を大いに増大させる」だけではなく、「フランスが第二級の国に落ちぶれる」ことから身を守り、その「威信」を保ち、人民に「個人的利益」を超えた「公共の利益」に対する関心 (*travail, op. cit.*, pp. 214-15.) を喚起する不可欠の手段と考えたのである。

- (1) トクヴィルは、青年時代 J・B・セーを学ぶが、一貫してセーの主張する経済の自動調整メカニズムに対しては懐疑的であり、セー以降のデュノワイエ (B. Ch. P. Dunoyer) やバステリア (E. Bastiat) らの経済的自由主義に対しては批判的であった。この点 E. Kestlasy: *Le libéralisme de Tocqueville à l'épreuve du paupérisme*, Paris, Harnattan, 2000, p. 82. sqq.

- (2) トクヴィルは、イギリスを「旅する人」が最初そこでの「福祉」と「余暇」、「あまねく豊かさ」を目にするが、その内部に目を向けると、「教区の帳簿」が「この繁栄した国の六分の一の人が公的慈善で生活している」ことを伝え、植民地主義者としてのトクヴィル

植民地主義者としてのトクヴィル

ていることを知るであろう、と云う。(Sur le paupérisme, rééd. Paris, Allia, 2001, p. 8.) また、トクヴィルの「救貧」論については、稲井誠「トクヴィルの救貧論」大阪市大『経済学雑誌』一〇二巻一号二〇〇一年。

- (3) Emancipation des esclaves, *Œuvres*, t. 3-1, p. 85.
- (4) L'Inde, *Œuvres*, t. 3-1, p. 456.
- (5) Travail sur l'Algérie, *Œuvres*, t. 3-1, p. 217.
- (6) Seconde lettre sur l'Algérie, *Œuvres*, t. 3-1, p. 153.
- (7) Rapport, op. cit., p. 381. アルジェリア植民地に関して、彼は、ほぼ同時期に同じ問題を論じたサン・シモン主義者やフリーエ主義者とは一線を画している。集団主義に批判的なトクヴィルは、その地で「ファランステール」、「小共同体」を構築し、「[私的] 所有や個人的生活が全く存在しない」植民地を、「自分の個別的利益のためではなく、群れの利益のために働く蜜蜂のようだ」と嘲笑する。(Travail, op. cit., p. 250.) なお、サン・シモン主義者の植民地論については、藤田勝次郎「サン・シモン主義者と植民地主義」一・二『國學院経済学』四七巻三・四号一九九九年四八巻三・四号二〇〇〇年を参照。
- (8) L'Inde — Plan de la suite de l'ouvrage, *Œuvres*, t. 3-1, p. 478.
- (9) De la démocratie en Amérique, *Œuvres* (éd. de la Pléiade), 1992, t. 2, p. 612. 井伊玄太郎訳(講談社学術文庫)下巻一八七ページ。ただし、訳文はこれに於らない。以下同様。
- (10) Lettre à J. S. Mill, *Œuvres*, t. 6-1, p. 335.

#### 四 結びにかえて

これまで明らかにしてきた植民地主義者としてのトクヴィルは、あらためていうまでもなく、民主主義の危機を説く自由主義者でもあった。植民地主義と自由主義——トクヴィルの一見異質的に見えるこの両面性を前に、ひとは、彼のアルジェリア植民地論と『アメリカの民主主義』は「不整合」であると結論するか、またそれを、彼の論理の「一貫性の欠如」、その「非連続性」に求めようとするのである。<sup>(2)</sup>

しかし、これまでみてきたことから明らかなように、ほぼ同時期に書かれた植民地についての諸著作と『アメリカの民主主義』とは、決して「不整合」なものでも、「一貫性」を欠いたものでもなかったのである。さらに彼は「アメリカの民主主義」を論じるとき、そこで「説明の中心」に置かれたのは「民主主義的人民」である「アングロ・アメリカ人」であり、黒人奴隷や先住民インディアンなどは「民主主義的でない」人民として、最初から議論の対象から排除していたのである。それどころか、彼は「ヨーロッパ人と他の人種の人びと」との関係を「人間自身と動物」のそれになぞらえるのである。(Democracy, *op. cit.*, pp. 367-88. 訳書 中巻 三〇四ページ。) 同じことはアルジェリアについてもいえる。トクヴィルは、アルジェリア植民地で形づくられるべき政治的・経済的諸制度、すなわち所有・行政・司法・教育などの諸制度について詳細に検討しているが、ここでもアルジェリアの「原住民」は対象の外におかれている。例えば、教育に関して、彼はヨーロッパ人の教育から「原住民」を厳しく排除する。文明的発展段階を異にする両者に同様の教育を行うことは不可能である、と考えるからであった。異人種を「動物」と同一視することは論外であるにしても、彼らを文明の発展段階を異にする「半ば文明化された人」であると考えるところから、彼は、西欧を「文明の使徒」と任じ、それによってその植民地支配を正当化するにいたるのである。

植民地主義者としてのトクヴィル

本稿は、トクヴィルの政治理論を正面から分析することを課題とするものでなく、彼の植民地主義の一端を明らかにしたにすぎない。だが彼の自由主義的政治理論は、彼の反面である植民地主義と重ね合わせ、あらためて再検討されるべきものであろう。

- (1) M. Richter ; *Tocqueville on Algeria, Review of Politics*, No 25, 1963, p. 385.
- (2) ʼТодоровʼ Todorov ; *op. cit.*, p. 271.